本多（ほんだ）　愛男（ちかお）

大凧（おおだこ）まつりを未来へ

文

西川（にしかわ）　麻里子（まりこ）

武富（たけとみ）　美由紀（みゆき）

佐本（さもと）　寿美子（すみこ）

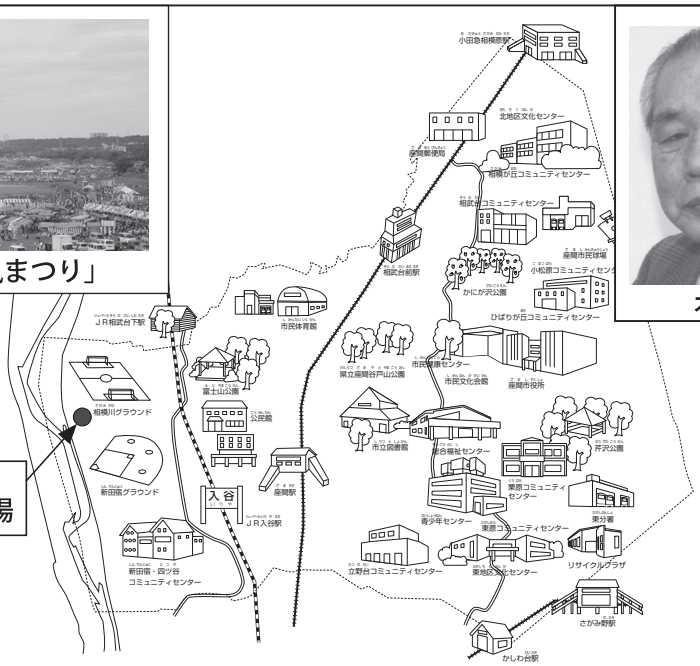
松岡（まつおか）　由美子（ゆみこ）

絵

有山（ありやま）　周一（しゅういち）

座間「大凧まつり」

本多愛男



座間
大凧まつり会場

西暦	和暦	できごと	時代背景
一九二五年	大正十四年	七月九日、新田宿で生まれる。	
一九三二年	昭和　七年	六歳で尋常高等小学校入学	
一九四四年	昭和十九年	青年学校中退 一八歳で海軍飛行予科練習生に志願する。	一九三七年 座間村から座間町となる。 一九三九年 第二次世界大戦 一九四一年 太平洋戦争
一九五一年	昭和二六年	二五歳で座間青年団団長となる。	
一九五二年	昭和二七年	座間町教育委員会が発足。 二十七歳で教育委員となる。	
一九六四年	昭和三九年	三九歳で座間町議会議員となる。	一九六四年 東京オリンピック
一九六八年	昭和四三年	四二歳で社会教育委員長となる。	
一九七六年	昭和五一年	五一歳で座間市長となり市政を進める。	一九七一年 座間町から座間市となる。
一九八九年	平成　元年	六三歳で座間大凧保存会会長となる。	一九八九年 昭和天皇崩御
二〇〇六年	平成十八年	六月七日八〇歳で亡くなる。	

【文・絵　作者紹介】

西川麻里子・松岡由美子・武富美由紀・佐本寿美子は座間市内小中学校の教員である。市教育研究所の教育課題研究員として、本多愛男に関する資料を調べ、今回の文章を執筆した。有山周一は座間市内小学校の校長で、挿絵を担当した。なお、座間市「豊かな心を育むひまわりプラン」冊子及び「郷土の先人に学ぶ」庵政三の挿絵も担当した。

空高く舞い揚がる大凧

平成二十七年五月、陽光の中、今年も相模川の広々とした河川敷で大凧まつりが開催されました。会場では、百畳敷きの大凧が、揚げられるのを待っています。市内中学校の凧やボーイスカウトの凧もあります。多くの屋台が軒を連ね、お囃子の太鼓の音が聞こえてきます。わんぱく相撲座間場所も開かれ、小学生の取り組みに、観客たちが歓声をあげています。

強い南風が吹き、凧揚げには絶好のコンディションです。法被姿の凧連たちが凧を支えて起こす差し手と綱を引っぱる引き手に分かれます。差し手と引き手は呼吸をあわせ、凧を起こし、同時に、綱を勢いよく引いていきます。大凧は、

平成 27 年度　大凧まつり

百畳敷きの大凧
十三メートル四方
重量一t（千kg）
引き手　百名以上
制作期間　三ヶ月

わんぱく相撲座間場所
小学一年生〜六年生までの相撲大会。四年生以上は、勝ち進むと両国国技館で行われる全国大会に出場できる。

凧連
大凧を作る人、揚げる人たちの集まり。

ゆっくり大地を離(はな)れ、風に乗り、ぐんぐんと空高く舞い揚がりました。観客からは、大きな拍手がわき、祭りをさらに盛り上げます。

大凧保存会(ほぞんかい)相談役の小俣博(おまたひろし)さんは、櫓(やぐら)の上で解説のアナウンスをしながら、

「この高く揚がった大凧を愛男さんは、空の上から見て喜んでいるだろう。」

と心の中でつぶやきました。

愛男さんというのは、座間市長だった本多愛男のことです。では、座間の大凧と、どのような関係があるのでしょうか。大凧の歴史から、ひもといてみましょう。

大凧の歴史

座間では、江戸時代のいつ頃からか、端午(たんご)の節句(せっく)に、男子、特に長男の誕生(たんじょう)と健(すこ)やかな成長を祝って「祝い凧」が揚げられるようになりました。そして、江戸時代の文化・文政年間になると、庶民(しょみん)の経済力が増し、有力者や資産家(しさんか)が、

櫓（やぐら）
祭りのために特設された高い台。

端午の節句
一年で五回ある節句の一つ。江戸時代から、男の子の誕生や成長を祝う行事とされていた。現在の子供の日。

文化・文政年間
１８０４～１８３０年頃。

村の若衆（若者）に頼んで、一間四方から二間四方ほどの大きさの「祝い凧」を作るようになりました。これが、二百年以上も続く座間の大凧の起源だといわれています。

大凧作りの際には、その家の主人から力づけのお酒がふるまわれ、それを目当てに凧作りを手伝う若者もいたそうです。凧揚げは、一年中、農作業に追われる人々にとって大きな楽しみだったようです。ところが江戸時代の天保年間になると、幕府はぜいたくを禁止する「倹約令」を出し、人々の生活をこまかく規制しました。「凧揚げもいいが、本業の農作業をおろそかにしてはいけない」というお触れが出たこともありました。しかし座間では、凧揚げの風習は絶えませんでした。なぜなら、凧揚げは村全体で端午の節句を祝う行事として、いつも庶民の暮らしの中にあったからです。若衆たちは、経験豊かな凧名人と呼ばれる人々からその作り方を学び、次第に村ごとに競って大きな凧を作るようになっていきました。

一間
一間は一・八メートル。

天保年間
天保の改革（1840～1842年頃）で倹約のため、ぜいたくが禁止された。

大きな凧
三間～四間の凧。

明治時代になると国の祝い事があった場合などに、より大きな凧が作られるようになり、昭和の初め頃には、座間村のあちらこちらで大凧が揚げられました。特に田んぼが広がり風の通りが良い、新田宿・四ツ谷・座間・入谷では、盛んに行われました。

愛男の生い立ちと決意

愛男は、大正十四年（１９２５年）七月九日、座間の新田宿で農業を営む本多家に、七人兄弟の長男として生まれました。幼い頃から大凧が揚がるのを見て育ちました。

愛男は六歳になり、座間尋常高等小学校に入学しました。体は弱かったのですが、読書が好きで、熱心に勉強をしました。「幼年会」という子どもたちの集まりにも参加して、「自分たちのことは自分たちの手で」という自立の精神を学びました。父からは、「世の中の役に立つことがあれば、思い切りやりな

幼年会での活動
「座間幼年會」道の会編『座間幼年会を語る会』での本多愛男のことば
『鳶尾山へ旅行に行くとか、その他の遊び等もありますがそれらの費用等は自分たちで稼ぎ出して、それで自分たちで行うことはあたりまえ…一切合財子ども達でやっていました。』

座間尋常高等小学校
現在の座間小学校。

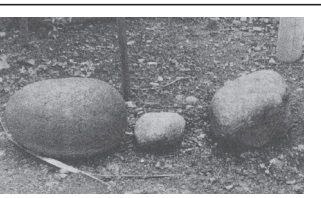
愛男の父…本多菊近
町議会議員や農業委員となり、地域のリーダーとして相模川左岸（座間側）の耕地整理・土地改良を行い、座間の農業の進展に大きな役割を果たした。

さい。」と言われて育ちました。

愛男は、上級生になるにつれ、「学校や地域で活躍するには、強い体力、精神力が必要だ。」と考えるようになりました。そこで、好き嫌いをしないで何でも食べたり、当時盛んに行われていた「力だめし」に挑戦したりしました。そして、小学校卒業後は、働きながら学べる座間村青年学校に進学しました。

昭和十六年（１９４１年）太平洋戦争が始まり、青年学校で共に学んだ友人たちが次々と出征していきました。心身ともに立派に成長した愛男も、十八歳の時、ついに海軍飛行予科練習生に志願しました。厳しい訓練を乗り越え

力だめし
力くらべ。石（大小あり、大きいものでは100kg程度）や米俵（60kg）を持ち上げる競争。現在も新田宿公民館等に力石が残っている。



新田宿公民館の力石
卵石（左）約101kg　菱石（右）97kg
中央は子ども用と思われる（重さは不明）

青年学校
昭和十四年に制定（せいてい）された農業技術・商業技術等を学ぶ学校。夜間および農閑期（のうかんき）に農家や商家の子どもが通った。

出征
軍隊の一員として、戦地に行くこと。

て、特攻隊の一員として戦地に赴くことになっていましたが、出撃することなく終戦を迎えました。

愛男は、終戦後まもなく座間に戻ってくることができました。しかし、多くの仲間が命を失ったにもかかわらず、自分が生き残っていることに悩み苦しむ日々を過ごしました。その中で、改めて命の尊さや平和の大切さについても考えました。そして、「祖国の復興のため、座間の発展のために尽くそう。死んでしまったはずの命なのだから、社会に役立てよう。」と決心しました。

大凧保存会の発足

終戦後、座間の復興を願う青年たちは、声をかけ合って青年団活動の発展に取り組みました。愛男は、新田宿青年団の代表として座間町青年団に参加していました。

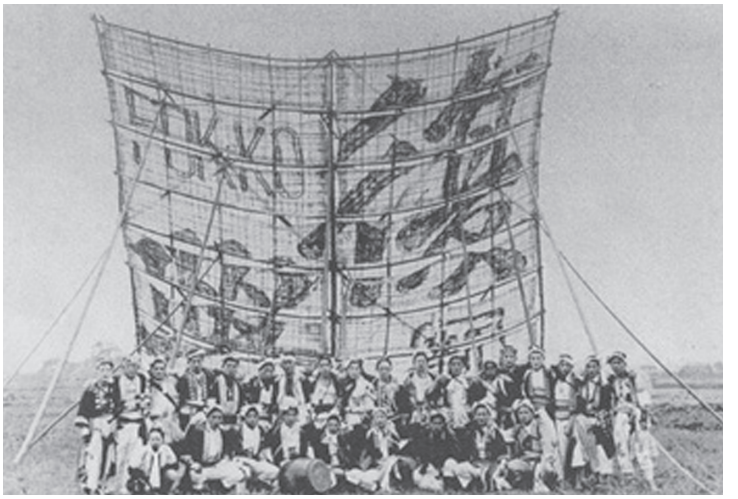
昭和二十一年（１９４６年）五月、戦時中に一時中断していた大凧揚げを真

特攻隊
特別攻撃隊のこと。特に太平洋戦争中、体当たりの攻撃を行った日本陸海軍の部隊。

復興
いったん衰えたものを再び盛んな状態にすること。

青年団
その地域に住む青年によって組織され、地域の親睦、社会奉仕などを目的とする自治団体。

っ先に再開したのは、新田宿青年団でした。みんなで力を合わせて作った伝統の大凧には「復興」の二文字が書かれ、人々を元気づけ、地域を盛り上げる役割を果たしました。



昭和21年 「復興」の大凧

愛男は、青年団活動の事業の一つとして、大凧揚げを推進しました。愛男の思いは、新田宿から座間全体に広がり、町全体で数個の大凧が揚がるほど盛大になりました。

しかし、昭和三十年代、高度経済成長期を迎えると、暮らしは豊かで便利になり、人々の価値観や楽しみは多様化しました。座間では都会に働きに出る若者が増えて、凧の作り手や綱の引き手である凧連たちが減っていきました。また、宅地化が進み、大凧揚げをするための場所を確保す

復興の大凧
大きさ四間四方
七・二メートル四方

高度経済成長
1955〜1973年頃の日本の好景気。

ることが難しくなりました。地域の結びつきは少しずつ薄れていき、せっかく復活した大凧揚げでしたが、次々に止めざるを得なくなってしまいました。

愛男は、「大凧揚げは、座間が誇るべき伝統行事だ。大凧揚げをなくすわけにはいかない。」と考え、大凧揚げの再開と保存に向けて、自分の考えに賛同し協力をしてくれる仲間を集めました。そして、若い頃から活動してきた青年団や、教育委員の経験を生かし、当時の町長に働きかけ、大きな支援を得ました。

やがて、その活動が実り、昭和四十年（１９６５年）、青年たちが中心になり、町の行事として「清和」と書かれた大凧が座間の空に揚げられました。

その後、大凧揚げは多くの人々の支持を受け、ついに昭和五十年（１９７５年）四月には、「大凧保存会」が発足しました。

凧を座間市のシンボルに

昭和五十一年（１９７６年）、座間市長となった愛男は、市政の発展に取り組

当時の町長
鹿野文三郎
昭和三十一年～四十六年まで座間町長を務める。
昭和四十六年～五十一年まで座間市長を務める。

む中で大凧揚げを座間のまちづくりのシンボルとして、盛り上げていきました。

毎年行われる座間の大凧まつりが五月の風物詩となり、昭和五十七年（１９８２年）に「かながわまつり五十選」に選ばれ、神奈川を代表する祭りの一つとなりました。

愛男は市長退任後、大凧保存会の会長になり、大凧まつりを後世に伝えようとしました。

平成三年、座間の大凧まつりは国の選択無形民俗文化財に指定され、伝統行事として毎年盛大に開催されるようになりました。

受け継がれる思い

平成十八年四月、大凧保存会会長の愛男は、大凧の文字書きに病をおして参加していましたが、それからまもなく、病院に入院しました。

大凧保存会 会長のあいさつをする愛男

風物詩
季節の感じをよく表している物事。

神奈川まつり五十選
座間の大凧まつりの他に五月に行われるまつりとして、「小田原北條五代祭り」（小田原市）「湯かけまつり」（湯河原町）などがある。

「座間の大凧」に寄せる思い
コミック「座間の大凧物語」発刊のあいさつから

ふだんの生活ではとても手のとどかない大空に風にのせて凧を踊らせる、自らの生命を凧にあずけ大空の中を飛揚する壮快さは何にもかえがたいものです。ことにさわやかな五月の河原で、十メートル四方、重さも数百キログラムにもなると、その興奮はいかばかりでしょうか。このような大凧を作り、揚げることは二千年をこえる凧の歴史の中でも珍しいものなのです。（中略）みなさんに座間の歴史と伝統について関心を持っていただければ、これに勝る喜びはありません。

祭りの数日前、大凧保存会の役員たちは、愛男を見舞いに行きました。今年の大凧まつりに会長である愛男が参加できないかもしれないと誰もが心配していました。愛男は、

「私のことは心配せずに、みんなで力を合わせて成功させてくれ。」

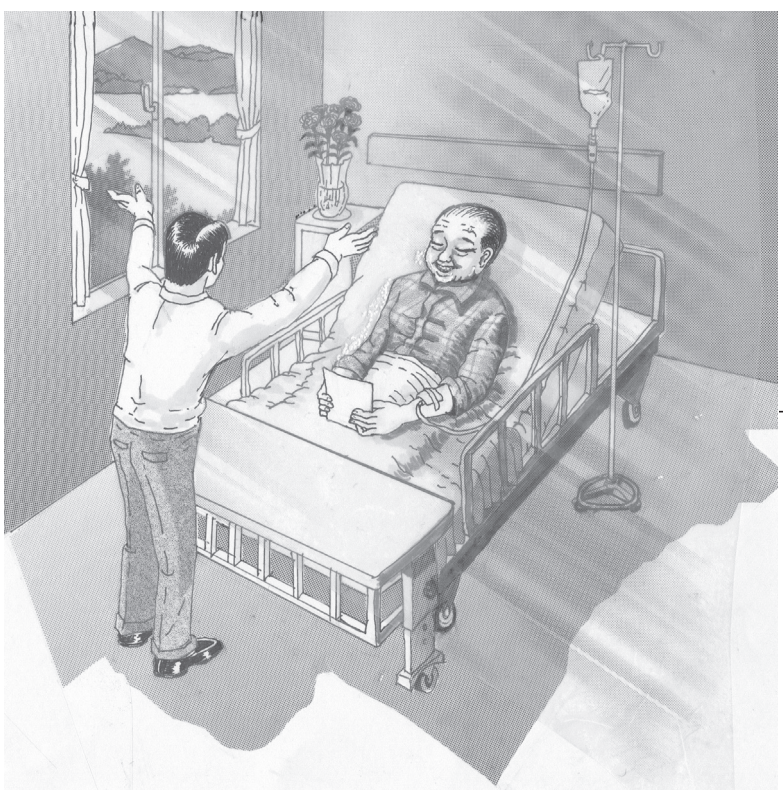
と言いました。

五月四日、大凧は病床にあった愛男の願いをのせてぐんぐん揚がり、長いこと空を舞い続けました。

三日後、役員のひとりだった小俣さんは高く揚がった大凧の写真を持って、再び愛男を見舞いに行きました。写真を見た愛男は、とても喜んで

「よかった、よかった。これからも頼む。」

と、言いました。



この年の大凧の文字は「慶祥」であった。

それから、一か月後の六月七日、愛男は安心したかのように、息を引き取りました。

その出来事から九年、平成二十七年五月、大凧は高く舞い揚がりました。

子どもたちの健やかな成長を願って行われる大凧まつりは、長年、地域の人々の絆（きずな）を深めてきました。それは、愛男をはじめとする大凧保存会の人々が、座間の伝統行事として大凧まつりを守り続けてきたからです。今では、市内の中学生が、地域や保存会の協力を得て、学校手作りの凧を揚げるようになりました。これからも、大凧まつりを通して育てられた「ふるさと座間」を愛する心は、子どもたちにずっと受け継（つ）がれていくことでしょう。

【参考・引用文献】

座間市市民部産業課　村野　守美「ふるさとのコミック　座間の大凧物語」〔一九九二〕
座間市教育委員会　鈴木　義範「座間むかしむかし」第十五集から「座間の大凧」
座間市商工観光課　座間市大凧まつりパンフレット
座間市商工観光課　座間市観光パンフレット「ざま～る」

※この文を作成するにあたり、座間大凧保存会相談役の小俣博様にご協力いただきましたことに感謝いたします。